



六

十歳で定年退職後、まだまだ先だなぁと感じていた五年の再雇用期間が瞬く間に終了し、晴れて無職の身となりました。曲がりなりにも四十七年間、大雨の日も大風の日も大雪の日も律儀に会社に通った挙げ句、ある日を境に無職になるといってもなかなか壊滅的なことはありません。いつかはこの日が来るであろうことは頭の中では理解していても、実際そうなるかと心身が変化に追いつきません。

よくネットの相談コーナーなどで「定年退職した夫が何する訳でも無く一日中ゴロゴロしていて鬱陶しい」みたいな奥様の愚痴を見掛けることがあります。幸いウチの奥さんはフルタイムの仕事が5年も残っているのに煙たがられることはありません。帰宅するまでの十時間、はてさてどう過ごしましょうか。

それでも最初の頃は庭の草取り、掃除、洗濯、片付け、買物でお出掛けなどゴソゴソしている間に一日が終わっていったのですが、一週間が過ぎ二週間が過ぎしているうちに何だか昔のことが頭に浮かぶことが多くなってきました。きつと時間を持て余している脳ミソが勝手に回想を始めてしまうのでしょうか。

何故だか真つ先に思い出したのが、長女が小学校に

老い老いに

木幡智恵美

49

夕

焼け通信十年目、我が家の一員となった犬とのエピソードを綴った『いとしのエリー』を連載した。そのあとに書いたのが『アンニョンハセヨ韓国』だ。六月に開催された日韓両国主催のサッカーワールドカップで韓国熱に浮かされ、韓国平和ツアー参加の気持ちを固めた。韓国へ行きたいとの思いは学生時代からあった。部活動の先輩が韓国旅行から帰った際、「歴史の裏側を見てきたよ」といった言葉がずっと心に残っていたのだ。平和ツアーの参加は、七年前に夫と三人の子たちと行った沖縄以来。その際、ひめゆり部隊にいたMさんが何度も口にした「知らなかったんです」が胸の奥にとどまっていたことも、歴史の裏側をもっと知らなければとの思いを強くしていた。今回のツアーは、夏休みで帰省中の娘と二人で参加することにした。実際に行ってみて、初日から衝撃の連続だった。午前中の見学を予定していた独立記念館、豊臣秀吉の朝鮮侵略（日本では朝鮮征伐）、東学農民革命運動（日本では東学党の乱）等、言葉からして歴史の裏側をまざまざと見せつけられる。午後まで食い込む濃密な時間、脳みそはとくに飽和状態を超えたままナムの家へ向かう。ここでも初めて知った歴史的事実は疲れを吹き飛ばし、話に聞き入り展示物に目を凝らした。慰安所を再現した部屋を目にした時、沖縄の真つ暗なガマの中で聞いて愕然としたことを思い出した。「危険な入り口付には住民、奥の安全なところには将校がいて、そこには慰安所があったんです」。翌日の安重根記念館でガイドさんから、安重根（アンジュングン）について、「韓国では伊藤博文暗殺とは言いません。射殺です。正面から堂々と打ったのです」と聞かされた時は、歴史の裏側から正面パンチを食らった気がした。西大門監獄では初めて柳寛順（ユガンソン）を知る。「私たち朝鮮人の独立運動は正しい。裁かれねばならないのは侵略した日本人だ」と主張を曲げなかった彼女の言葉も同様だ。

私が歴史の裏側の様々なことを詰め込んだ旅行をする少し前、何と、Y氏は中国を訪問していた。中国全土の地図が黒塗りで覆っていて正確なタイトルをしめすことはできないが、中国の福祉の実情を連載された。病院や老人ホームなどを視察し、変わりつつある社会主義国の医療・福祉について見聞きしてきたことが綴られている。

入学したときのことでした。当時苦慮したのが登校時間より親の出勤時間が早かったこと。共働きで車が一台しかなかったうえに下の子を保育園に連れて行かなくてはならないので余計に早く家を出なければならなかったのです。かといってホヤホヤの一年生を一人放っておくわけにも行かず、出した結論が原付を買って私が出社に間に合う時間ギリギリに娘を登校先の集合場所まで連れ添ってから出勤するという苦策でした。

それでも集合時間には若干早くて、一人残されてベソをかきそうな娘の顔を今でも有り在りと思い出すことができます。ピカピカの一年生なのに寂しい思いをさせてごめんなさいね、と今更ながらに反省しても詮無いことですが悔悟の思いは消えません。ただせめてもの救いだっただのが、放課後面倒を見ていただいていた学校近くの学童保育の女性の先生がとても優しくして良い方だったことでした。

長女はその後、殆どのことは親に相談することもなくさつさと自分で決めて行動し事後報告のみで終わるという手のかからない子に育ちました。どうせ親は当てにならないと思われていたに違いないと、時の止まった爺さんはボンヤリ縁側から初秋の空を眺めるしか為す術はないのでした。

30代フリーター 江川紹子が、石破茂の退陣をめぐる朝日新聞のインタビューで、「参院選の大敗で、責任論が出るのは当然では」と「石破おろし」について問われ、「それは党内の論理で、国民の関心は別のところにあるのでは」と答えていた（9月9日朝刊）。こういう当たり前の指摘を今までマスメディアで見たことがない。

年金生活者 「石破おろし」の根拠とされたのは、選挙で負けた党のトップは責任をとって辞任すべきだという理屈だ。インタビュした記者はこれと同じ理屈を使っている。しかし、国民が自公を過半数割れに追い込むことによってこの党に突きつけた責任の取り方は、下野することだった。つまり石破ひとりだけをやめさせる気はなかった。

国民は2度の国政選挙を通じて「安倍1強」政治の再来を拒否した。政府債務をかつてない規模に膨らませ、インフレになっても利上げできない大きな負の遺産を残したアベノミクスをいまや「悪夢」と評価するようになった

と推察される。

30代 ところが、自民党は野党の多党化に乗じて与党の座に居座った。

年金 国民は次善のあり方として、自民党が以前のような勝手な振る舞いをやめて野党の主張に耳を傾けるようになることを期待し、それができるのは石破くらいしかいないと判断した。「石破おろし」がエスカレートするにつれ、内閣支持率が上がり、「石破統投」への支持が広がったのはそのあらわれだ。

ところが、マスメディアはそうした国民の意思を掘り下げるのを怠った。「選挙で負けた首相の統投を支持する世論が広がった背景には、国民そつちのけで『コップの中の争い』にうつつを抜かず自民への愛想づかしがあったに違いない」（9月8日朝日新聞社説）と、行儀のよさを装った建前論で片づけた。

政治の取材とは基本的に与党内の権力闘争の取材であり、権力闘争の取材は闘争の当事者のいずれかの従軍記者

になることだと考えるマスメディアは、判断の物差しが「党内の論理」にならざるを得ず、国民の意思から離れていく。参院選後まもなく大手2紙がそろって「石破退陣」の誤報をした背景にはそれがある。

30代 石破が下野しない理由として挙げたのが「比較第1党の責任」だった。年金 それなら、何かひとつでもいいから今までの自民党にできなかったような政策を実現してみせろ。下野を代償にすればできるだろう。それがその後の国民の意思となったはずだ。しかし、石破は最後まで下野する覚悟を持つことができず、そうした政策をなにひとつ実行に移すことができなかった。

例を挙げるなら、遅れているジェンダー平等を一步前に進める選択的夫婦別姓制度の導入であり、過度な対米従属からの解放につながる日米地位協定の見直しであり、裏金事件を許した政治資金制度の抜本改革などだ。いずれも自民党が反対するか消極的になっている政策ばかりだが、もし石破が野党

と組めば、実現ないし着手にこぎつけることができた。ただし、最悪の場合、自民党の分裂を引き起こしかねない。分裂すれば、少数与党にさえとどまることはできず、下野は必至となる。

30代 石破はそれを避けることを優先した。退陣の記者会見で党内の分断の回避を辞任の理由にあげた。

年金 それなら、せめて立憲民主党などが日本型ベーシックインカムとして主張する「給付付き税額控除」の制度化くらいは進めれば、党の分裂を回避しつつ、新しい所得の再分配システムへの道を切り開くことができたかもしれない。石破自身もそれに乗り気な姿勢を見せたこともあった。だが、「石破おろし」への対応に手間も時間も取られて、取り組みなかった。

もし、石破に党の分裂、そして下野の覚悟があったら、「石破おろし」など無視し、野党と組んで政策の実現に取り組むことができたはずだ。その覚悟を持てなかったのは、「党内野党」

ニュース日記 983
中村 礼治

石破茂は惜しいことをした

暮らしが長かったせいもあるだろう。冷や飯を食わされてきたのは、自分とんがり過ぎたせいだ。総裁になり、「党内与党」になったからには、融和に努めなければならない。そう考えたのかもしれない。そうだとしたら、彼は国民の多数の意思を見誤った。もともと下野を求められていたのに、政権にとどまることのできたのは、刑の執行を猶予されていたからだということを忘れてしまった。その現実を受け入れることができていたら、それを逆手にとることもできたはずだ。壊れかけた自民党を野党と組んで本当に壊すことと引き換えに、自らのレガシーとなるような政策を実現することができたかもしれない。石破は惜しいことをしたと思う。

30代 後継総裁の候補として高市早苗、小泉進次郎らの名が挙がっている。年金 「安倍政治」の継承者を自任する高市が首相になれば、野党の多くに反発され、政策協議は簡単には進まなくなるだろう。国民にはそのタカ派ぶりと、アベノミクス絶賛ぶりが警戒されるだろう。理念の欠如した小泉進次郎が首相になれば、思いつきの発言や行動で、野党の不信を買い、国民人気がやがて底をつくだろう。自民党が少数与党から脱するハードルは高い。